

条件を表さない「タラ」について

戸村佳代

0. はじめに

S_{-1} と S_{-2} で表される二つの事態の時間的前後関係を表す場合には、さまざまな表現が用いられる。例えば、(1)～(5)の文は全て S_{-1} で表された事態に引き続いて、 S_{-2} で表された別の事態が発生したということを表現している。

- (1) 昼ごはんを食べ始めた時、田中さんが来ました。
- (2) そのチョコレートを食べた後で、お腹が痛くなった。
- (3) 山田さんは喫茶店に入って、すぐコーヒーを注文した。
- (4) 一生懸命勉強するようになってから、日本語が上手になった。
- (5) トンネルを出ると、辺りには雪がたくさん積もっていた。

これらと同じ時間関係は「～タラ」を使っても表すことができる。

- (1)'昼ごはんを食べ始めたら、田中さんが来ました。
- (2)'そのチョコレートを食べたら、お腹が痛くなった。
- (3)'山田さんは喫茶店に入ったら、すぐコーヒーを注文した。
- (4)'一生懸命勉強するようになったら、日本語が上手になった。
- (5)'トンネルを出たら、辺りには雪がたくさん積もっていた。

「 S_{-1} タラ S_{-2} 」という表現は、 S_{-1} が S_{-2} が成立するための仮定条件を表している文として、「 S_{-1} ナラ S_{-2} 」, 「 S_{-1} (レ)バ S_{-2} 」, 「 S_{-1} ト S_{-2} 」等と比較して論じられることが多く、「時」の表現として論じられることはほとんどなかった。⁽¹⁾しかし、上に挙げたような文が存在することを考えると、「タラ」の意味を論じる際に「仮定条件」という枠を取り払ってみる必要があるように思われる。そこで、本稿では(1)'～(5)のような「時」を表す「タラ」に注目し、上で列挙された時の表現のうち、「～タトキ」と比較しながら、その意味と用法について論じてみたい。

1. 「タラ」の機能

「 S_{-1} タラ S_{-2} 」は、初級段階で導入される文型のひとつで、一般に「仮定を表す」とされている。次の文では、 S_{-1} は未成立の事態である S_{-2} が成立するための仮定条件を表している。

- (6) a. 安かったら、買います。
 b. あした天気がよかったら、ピクニックに行くつもりだ。
 (7) a. カードを調べてみたら、その本がどこに置いてあるか分かります。
 b. いっしょうけんめい勉強したら、日本語が上手になります。
 c. 図書館に行ったら、山田さんに会います。

それでは、これらの文の文末を完了形に変えた場合、「未完了の事態についての仮定」が「完了した事態についての過去における仮定」になるだろうか。

- (8) a. 安かったら、買いました。
 b. きのう天気がよかったら、ピクニックに行くつもりだった。
 (9) a. カードを調べてみたら、その本がどこに置いてあるか分かりました。
 b. いっしょうけんめい勉強したら、日本語が上手になった。
 c. 図書館に行ったら、山田さんに会った。

確かに、(8)はS₋₁で実際とは異なる過去の事態を仮定して述べている。しかし、(9)の文のS₋₂は、それぞれ次の二通りに曖昧である。

- ① 実際とは異なる過去の事態を仮定する。
- ② 既に過去において実現している出来事を述べる。

S₋₁の曖昧性を採り除き、一義的に過去における仮定条件を表すようにするためには(9)'のような形をとらなければならない。⁽²⁾

- (9)'a. カードを調べてみたら、一階に置いてあると書いてあったはずでした。
 b. いっしょうけんめい勉強したら、日本語が上手になったかもしれない。
 c. 図書館に行ったら、山田さんに会っただろう。

同様に、(8 a)も(8 a)'のように表した方が、自然さが増すようである。

- (8)'a. 安かったから、買った はずです／かもしれません／でしょう。

「ハズダ」、「カモシレナイ」、「ダロウ」等のモダリティー要素を付加しなければ、はっきりと仮定条件であることを表すことができないということ、また、(1)'~(5)'には仮定条件を表すという読みが成り立たないということは、即ち、「タラ」そのものがプロトタイプの意味機

能として假定条件を表す機能を持っていないことを意味する。

「タラ」が本来もっている意味的機能、言い換えれば、「タラ」の中心的な意味機能とは、(1)'～(5)'が(1)～(5)と言い換えられることから示唆されるように、 S_{-1} と S_{-2} の時間的前後関係を示す機能であると考えられることができるように思われる。即ち、「 S_{-1} タラ S_{-2} 」においては、 S_{-1} で述べられた行為・状況は S_{-2} で述べられる行為・状況に先行していなければならないのである。⁽³⁾ このことは、(1)'～(5)'のように「 S_{-1} タラ」が假定条件を表さない場合だけでなく、假定条件を表している場合にもあてはまる。(10)が容認可能でないのは、「 S_{-1} タラ S_{-2} 」における S_{-1} と S_{-2} の時間関係の制約が満たされていないためであると言える。⁽⁴⁾

- (10) a. * 明日雨が降ったら、今日出かけます。
b. * 来月国に帰ったら、一緒に連れて行ってください。

「 S_{-1} タラ S_{-2} 」の中心的意味機能が假定条件を表すのではなく、時間的前後関係を表すものであるとすると、それはどのような事態の時間的前後関係を表すのだろうか。また、その文の成立には、どのような制約が働いているのだろうか。節を改めて考えてみることにする。

2. 「 S_{-1} タラ S_{-2} 」の用法と意味

Alfonso(1966)では日本語の「タラ」に相当する英語の表現について、次のような説明が行われている。⁽⁵⁾

- ① S_{-2} が完了形の場合： 'WHEN'
② S_{-2} が非完了形の場合： 'IF'

単純に考えれば、 S_{-2} の述語が完了形であれば「～タトキ」と置き替えることができ、 S_{-2} が非完了形であれば「～タトキ」とは置き替えられないということになる。

確かに、次の例では「タラ」を「～タトキ」に替えても、その表す内容は変わらない。

- (11) a. 図書館に行ったら、山田さんに会いました。
b. 図書館に行った時、山田さんに会いました。
(12) a. 喫茶店でコーヒーを飲んでいたら、モーツアルトの曲が流れてきました。
b. 喫茶店でコーヒーを飲んでいた時、モーツアルトの曲が流れてきました。

ところが、 S_{-2} が完了形であっても「タラ」が「タトキ」で置き替えられない場合がある。

- (13) a. カードで調べてみたら、その本は一階に置いてあると書いてありました。
b. * カードで調べてみた時、その本は一階に置いてあると書いてありました。

- (14) a. 一生懸命勉強したら、日本語が上手になりました。
b. * 一生懸命勉強した時、日本語が上手になりました。

それでは、どのような場合に「～たら」は「～タトキ」と置き替えることができ、どのような場合に置き換えることができないのだろうか。まず、「 S_{-1} たら S_{-2} 」の文を大きく、① S_{-1} の主語が一人称の場合、② S_{-1} の主語が一人称でない場合、の二つに分けて考えてみたい。

2.1 S_{-1} の主語が一人称の場合

まず、次の二つの文を比べてみよう。

- (15) a. 道に迷って困っていたら、お巡りさんが教えてくれた。
b. * 道に迷って困っていたら、お巡りさんに教えてもらった。

(15)のaとbの S_{-2} で描写されている出来事は、実質的には何ら変わらない。にもかかわらず文法性に違いが生じているのは、(15a)では S_{-2} の事態に対する話者の積極的な意志が働いていないのに対して、(15b)の表現は話者の意志が関与していることを表し得るものだからである。話者の意志が関与しているかどうかは、(16)の二文を観察すると一層明らかとなる。

- (16) a. * お願いして、お巡りさんが道を教えてくれた。
b. お願いして、お巡りさんに道を教えてもらった。

(16)の「お願いして」の部分は、主文の行為が行われる際の付帯状況を示すものであり、話者が意図的に「お巡りさんが私に道を教える」という行為を導いたことを表すが、これは「～テクレル」とは共起しない。

以上の観察から、 S_{-1} の主語が一人称である場合の「 S_{-1} たら S_{-2} 」の成立の制約として、(17)が考えられる。

(17) 「 S_{-1} たら S_{-2} 」において、 S_{-1} の主語が一人称の場合には S_{-2} の内容は話者の意志・意図によって影響を受けるものであってはならない。

(17)の制約により、 S_{-1} の主語と S_{-2} の主語が共に一人称の場合、 S_{-2} の述語は〔+Volitional〕であってはいない。一方、「 S_{-1} タトキ S_{-2} 」の文にはそのような制約はない。

- (18) a. * 道に迷って困っていたら、お巡りさんに教えてもらった。

- b. 道に迷って困っていた時、お巡りさんに教えてもらった。
- (19) a. * 昨日病院にお見舞いに行ったら、帰りに買物をした。
b. 昨日病院にお見舞いに行った時、帰りに買物をした。
- (20) a. * 家に帰ったら、田中さんに電話をかけた。⁽⁶⁾
b. 家に帰った時、田中さんに電話をかけた。
- (21) a. * 家に帰って時計を見たら、もう9時過ぎだということを確認した。
b. 家に帰って時計を見た時、もう9時過ぎだということを確認した。

(22)～(23)はS₋₁の述語が〔-Volitional〕であるため、文法的となる。

- (22) a. 家に帰ったら、眠くなった。
b. 家に帰った時、眠くなった。
- (23) a. 家に帰って時計をみたら、もう九時過ぎだということに気が付いた。
b. 家に帰って時計を見た時、もう九時過ぎだということに気が付いた。

しかし、S₋₂が話者の意志による制御をうけているかどうかは単に使われている動詞の意味素性だけで決定されるわけではない。(24)～(25)のaの文はS₋₂に〔+Volitional〕の意味素性をもつ動詞が使われているために非文法的となっているが、bの文に例示されるように述部を話者の意志によって左右されない可能形や受身形に変えると文法的な文が得られる。

- (24) a. * 昨日、病院にお見舞いに行ったら、帰りに買物をした。(=(19a))
b. 昨日、病院にお見舞いに行ったら、帰りに買物ができなかった。
- (25) a. * 家に帰ったら、田中さんに電話をかけた。(=(20a))
b. 家に帰ったら、田中さんに電話をかけられた。

ここで、注意しておかなければならないのは、S₋₂はその主語の意志ではなく、その文の話者の意志によって制御されていない、という点である。したがって、S₋₂の主語が一人称でなければ、S₋₂の述語が〔+Volitional〕であっても「タラ」が現れ得る。

- (26) 私が教室に { a. 入ったら }
 { b. 入った時 } , 先生が授業を始めた。
- (27) 道に迷って { a. 困っていたら }
 { b. 困っていた時 } , お巡りさんが教えてくれた。
- (28) 家に帰って { a. 時計を見たら }
 { b. 時計を見た時 } , 母が「その時計、止まってるよ」と言った。

S₋₂の主語が一人称ではなく、また述語が[-Volitional]である場合も、(17)の条件に当てはまるので、文法的な文が生ずる。この場合、「～たら」を「～トキ」に換えても文法性は変わらない。

(29) 昨日病院にお見舞いに { a. 行ったら }
 { b. 行った時 } , 木村さんは意外に元気だった。

(30) 家に { a. 帰ったら }
 { b. 帰った時 } , 彼女が玄関の前に立っていた。

(31) 家に帰って時計を { a. 見たら }
 { b. 見た時 } , 9時だった。

ところが、(34)～(36)では、「～たら」を「～トキ」に置き換えた文は非文法的となる。

(32) a. 友達からもらったリンゴを食べたら、まずかった。

 b. * 友達からもらったリンゴを食べた時、まずかった。

(33) a. 松山先生に会ってみたら、とても優しい先生だった。

 b. * 松山先生に会ってみた時、とても優しい先生だった。

(34) a. 北海道は寒いと聞いていたが、行ってみたらそんなに寒くなかった。

 b. * 北海道は寒いと聞いていたが、行ってみた時、そんなに寒くなかった。

これらの文ではS₋₂は話者の主観的な判断を表している。例えば、(32 a)では「リンゴを食べる」という行為が完了した時、その行為をきっかけにして、「リンゴ」の属性を主観的に判断して述べているのである。もっと言えば、S₋₂に示された話者の主観的判断の対象はS₋₁の要素である「リンゴ」である。即ち、(32)～(34)のaの文はS₋₁で述べられている行為を基に、S₋₁の行為が完了した過去の時点においてそれぞれ次の(35)～(37)の判断を下したということを意味している。

(35) 友達からもらったリンゴはまずい。

(36) 松山先生は優しい先生だ。

(37) 北海道はそんなに寒くない。

(34 b)は(32 b)、(33 b)に較べると、容認可能性が高いように思われるが、(34 b)'のように、「ハ」が付加されれば、全く問題がなくなる。

(34 b).北海道は寒いと聞いていたが、行ってみた時は、そんなに寒くなかった。

この文では、「ハ」を用いることにより「私が行った時」と「それ以外の時」とが対照的に述べられていることになる。つまり、「寒い」という話者の判断は北海道の属性について言うのではなく、一時的な状態として示されているため、「～トキ」が用いられるのである。

2.2 S₋₁の主語が一人称ではない場合

次に、S₋₁の主語が一人称ではない場合を観察してみる。主語が一人称である場合と異なり、S₋₁とS₋₂の主語が同一であるか否かにかかわらず、S₋₂は〔+Volitional〕であってもよい。(38)～(39)はS₋₁の主語とS₋₂の主語が同じ場合、(40)～(41)は、両者が異なる場合の例である。

(38) 先生は教室に $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 来たら} \\ \text{b. 来た時} \end{array} \right\}$, すぐ授業を始めた。

(39) 加藤さんは、練習が $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 終わったら} \\ \text{b. 終わった時} \end{array} \right\}$, 水を飲んだ。

(40) 田中さんが $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 来たら} \\ \text{b. 来た時} \end{array} \right\}$, 先生は授業を始めた。

(41) 列車がトンネルに $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 入ったら} \\ \text{b. 入った時} \end{array} \right\}$, 昼ご飯を食べ始めた。

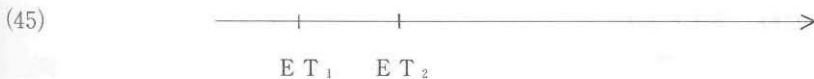
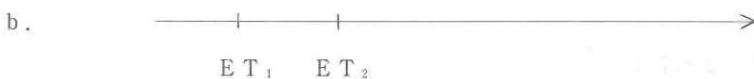
また、S₋₂が〔-Volitional〕の場合も「～タトキ」と同様、「～タラ」を使った文は文法的である。

(42) 田中さんが来たら、会場が急に華やかになった。

(43) 田中さんが来た時、会場が急に華やかになった。

しかし、(42)と(43)がどちらも文法的であるということは必ずしもこの二つの文の表す内容が同じであるということにはならない。(42)は「田中さんがきたこと」が「会場が急に華やかになったこと」のきっかけであるということ述べているのに対して、(43)ではそのような関係を含意せず、単に、S₋₂で述べられた事態を時間的に特定しているにすぎない。

ここで、「田中さんが来た」時点をET₁、「会場が華やかになる」という変化が完了した時点をとると、(42 a)と(42 b)におけるET₁～ET₂の時間的關係はそれぞれ(44)、(45)のように示される。⁽⁷⁾



(44)のaとbによって図示されるように、「～タラ」の文ではET₁とET₂の間隔が比較的に広い場合も狭い場合も表し得るのに対して、「～タトキ」は両者の間隔が狭い場合しか表すことができ

ないのである。⁽⁸⁾

「タラ」と「タトキ」とのこのような違いは次の a と b の文法性の違いにはっきりと現れている。

- (46) a. 田中さんが来たら、会場がだんだん華やかになった。
b. * 田中さんが来た時、会場がだんだん華やかになった。
- (47) a. 長い間暑い日が続いていたが、昨日一日雨が降ったら、今日は涼しくなった。
b. * 長い間暑い日が続いていたが、昨日一日雨が降った時、今日は涼しくなった。
- (48) a. 山田さんが来たら、しばらくして田中さんが帰った。
b. * 山田さんが来た時、しばらくして田中さんが帰った。

2.3 状態を表す節「タラ」との関係

この節では前節とは視点を変えて、 S_{-1} 、 S_{-2} がそれぞれ状態を表している場合を見ることにする。

2.3.1 S_{-1} が状態を表す場合

S_{-1} が属性を表している場合には「タラ」を用いることはできない。

- (49) a. * まだ若かったら、親に反抗しました。⁽⁹⁾
b. まだ若かった時、親に反抗しました。
- (50) a. * 学生だったら、日本語をよく勉強した。
b. 学生だった時、日本語をよく勉強した。

文法的である (49 b) の S_{-1} 、 S_{-2} の事態が成立している‘時’をそれぞれ ET_1 、 ET_2 で表すと、 ET_1 と ET_2 の関係は (51) のように図示される。

(51) 

$$ET_1 = ET_2$$

$ET_1 = ET_2$ という関係のために、 S_{-1} と S_{-2} の順序を逆にして「 S_{-2} トキ S_{-1} 」というかたちにすると、元の文と焦点に違いはあるものの文法的な文ができる。

- (52) 親に反抗した時、まだ若かった。
(53) 日本語を勉強した時、学生だった。

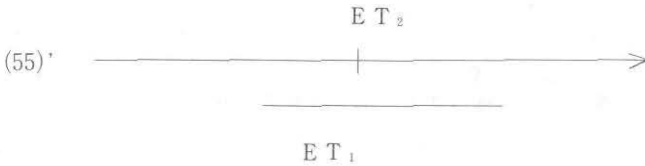
(49 a)、(50 a) が非文法的となるのは、「 S_{-1} タラ S_{-2} 」では ET_1 が ET_2 に先行していなければならないという条件による。

S₋₁が動作の継続を表している場合には、(54)～(55)で見ると「～たら」も「～トキ」も

文法的になる。

- (54) a. 図書館で勉強していたら、河本さんに会った。
b. 停留所へ向かって歩いていたら、一台の車が目の前で止まった。
(55) a. 図書館で勉強していた時、河本さんに会った。⁽¹⁰⁾
b. 停留所へ向かって歩いていた時、一台の車が目の前で止まった。

(55)のET₁とET₂は(55)'のように図示することができる。



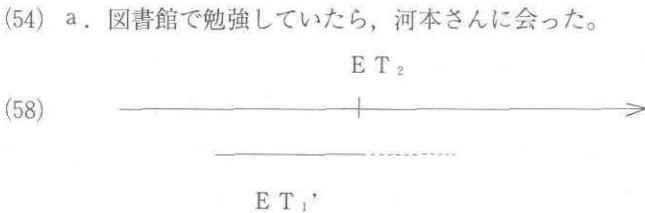
ここでは「ET₁ ET₂」という関係が成り立っている。S₋₁とS₋₂を逆にした文が文法的になるのは、(49a)、(50b)の場合と同じである。

- (56) a. 河本さんに会った時、図書館で勉強していた。
b. 一台の車が目の前で止まった時、停留所へ向かって歩いていた。

(54)と(55)は一見、それぞれ同じ知的意味内容を持っているように見えるが、(54)は(55)と異なり、S₋₁とS₋₂を入れ替えた文は容認可能な文にはならない。

- (57) a. * 河本さんに会ったら、図書館で勉強していた。
b. * 一台の車が目の前で止まったら、停留所へ向かっていた。

(56)と(57)の文法性の違いは、ETが(58)に示すET'として話者に認識されていることによって生じている。(54a)の時の関係は次のようになっている。



(55)'のET₁がS₋₁の行為が実際に行われている時間を示しているのに対し、ET₁'は、その行為が話者に認識されている時間を示す。つまりET₁'が示す時間続いていた動作がET₂以後も行われたかどうかは不問となっているのである。

「 S_{-1} タラ S_{-2} 」での‘ ET_1 ET_2 ’つまり、 S_{-2} の事態が S_{-1} に後続するという時間関係は、上に述べた‘心理的な（話者に認識されている） ET ’によって成立している。

S_{-1} と S_{-2} が共に動作の継続を表している場合は‘ ET_1 ET_2 ’の関係が成立しない。

(59) * 私が図書館で勉強していたら、佐藤さんは部屋でテレビを見ていた。

上に述べた「心理的な ET 」は、別の事態の発生によってある事態の認識がとぎれてしまう時点、つまり、ある事態の心理的終了時が設定されたものである。ところが、継続を表す文では、その‘時の一点’を指定することはできない。心理的な ET を設定する必要のない「～トキ」を含む次の文は文法的である。

(60) 私が図書館で勉強していた時、佐藤さんは部屋でテレビを見ていた。

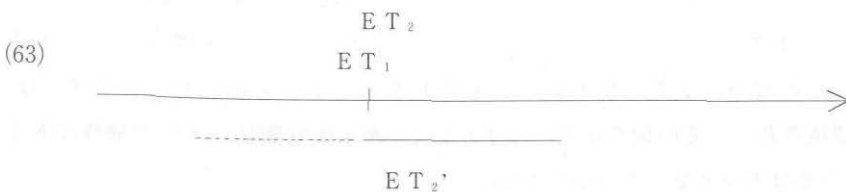
2.3.2 S_{-2} が状態を表す場合

S_{-2} が状態を表している次のような場合は、「タラ」が条件を表していない格好の例となる。

- (61) a. トンネルを出たら、辺りには雪がたくさん積もっていた。(=(5)')
 b. 田中さんの部屋に遊びに行ったら、田中さんはレポートを書いていた。
 c. カードを調べてみたら、その本は一階に置いてあると書いてありました。(=(13a))
 d. ずいぶん寒いと思ったら、今日は典型的な冬型の気圧配置だった。

例えば(61a)において、「今日、典型的な冬型の気圧配置だった」ということが「ずいぶん寒いと思った」かどうかを条件にしていないのは明らかである。話者の感じ方がどうであれ、冬型の気圧配置であったという事実は変わりようがない。

一見すると、これらの文では‘ $ET_1 \rightarrow ET_2$ ’も成立しないように思われるかもしれない。仮にこれらの文の ET_1 と ET_2 の関係が(62)のように表されるとすると「タラ」は使えないはずである。しかし、(61)の文の時の関係は(63)のように図示される。



このことを(61 a)を例にとって考えてみよう。「雪が積もっている」という状態は、現実にはE T₁で示された時点以後ばかりではなくE T₁以前にも存在していた状態である。E T₁以前とE T₁以後との違いは、その状態を話者が認知していたかどうかということにある。(62)では、S₋₂の状態が話者に認知されている‘時’がE T₂として示されている。つまり、「トンネルを出る」という動作が完了して始めて（「トンネルを出た」ことをきっかけにして）「雪が積もっている」状態を発見し、自己の認識の世界に取り込んだのである。⁽¹¹⁾このため、(61)は(64)のようにパラフレーズすることができる。⁽¹²⁾

- (64) a. トンネルを出た時、辺りに雪がたくさん積もっているのが見えた。
b. 田中さんの部屋に遊びに行き、見ると、田中さんはレポートを書いていた。
c. カードを調べてみた時、その本は一階に置いてあると分かりました。
d. ずいぶん寒いと思った時、今日は典型的な冬型の気圧配置がということを思い出しました。

(63)で示される時の関係は、2.2.1 で見た「S₋₂が話者の主観的判断を表す場合」にもあてはまる。

- (65) a. 友達からもらったリンゴを食べたら、まずかった。(=(32 a))
b. 松山先生に会ってみたら、とても優しい先生だった。(=(33 a))
c. 北海道は寒いと聞いていたが、行ってみたら、そんなに寒くなかった。(=(34 a))

以上観察してきたように、S₋₁かS₋₂のいずれか一方が状態を表す場合には、「タラ」が介在することによってその状態の始点または終点が心理的に指定されるのである。

3. まとめ

以上、本稿では「S₋₁タラS₋₂」のS₋₁が仮定条件を表さない用法があることを再確認し、その用法の典型的な例である文末が完了形の場合に焦点を当てた。1. では、「タラ」の本質的な意味機能は条件を表すものではなく、S₋₁とS₋₂の時間的前後関係を表すものであることを指摘した。また2. ではS₋₂の内容は話者の意図・意志によって制御され得る事態を表せないため、S₋₁の主語が一人称の場合には 1) S₋₂の主語が一人称でない、2) S₋₂の述語が[-Volitional]である、の条件のうち少なくともいずれか一方を満たしていなければならないことを見た。さらに、「～タトキ」との比較に基づき、状態を表す節が含まれている場合、「S₋₁タラS₋₂」が実際のE T（出来事時）とは別に、話者がある事態を認識した時点が指定された「心理的E T」を含意していること、またその「心理的E T」の存在によってS₋₁とS₋₂の時間的前後関係、即ち、S₋₂がS₋₁に後続することが明確に時間軸上に示されることを見た。

従来「タラ」＝「仮定条件」という「ステレオタイプ」的な枠にとらわれすぎていたために「タラ」のプロトタイプの意味機能が見落とされていたように思われる。「タラ」の意味と機能をより明らかにするためには、文末が非完了形の場合についても更に検討する必要があるが、それについては今後の課題としたい。

註

1. これらの条件節について論じたものには、北条（1964）、川口（1984）等がある。
2. 過去における仮定条件を表す文としては次の a～c の方が自然であるかもしれない。
 - i) a. カードを調べてみていたら、一階に置いてあると書いてあったはずです。
b. いっしょうけんめい勉強していたら、日本語が上手になっていたかもしれない。
c. 図書館に行っていたら、山田さんに会っていただろう。なぜ「～テイル」を用いた方が自然な文になるかについては、ここでは立ち入らないことにする。
3. Alfonso(1966)にも次のような記述がある。

TARA can be considered as a compound of -TA and RA ……the verb show an action or a situation which is finished or completed before the action or situation expressed in the second clause.
4. 「タラ」とならんで仮定条件を表すとされている「 S_{-1} ナラ S_{-2} 」には、ここで述べたような時間的前後関係に関わる制約がないため、(i)～(ii)は非文とはならない。
 - (i) 明日雨が降るなら、今日出かけます。
 - (ii) 来月国に帰るなら、一緒に連れて行ってください。
5. 以下に続く議論は、「タラ」を導入する際の手掛りとしてこのような説明を加えることを必ずしも否定するものではない。他の初級～中級の日本語教科書の文法解説では時間的前後関係を表す「タラ」について記述したものが無いことを考えると、評価できるものであろう。
6. (20 a)は次のように S_{-2} が過去の習慣を表す場合や繰り返し行われる行為の場合には容認可能となる。
 - (i) 学生のころ、家に帰ったらいつも田中さんに電話をかけた。
 - (ii) 家に帰ったら、友達に次々に電話をかけた。
7. ETは出来事時(Event Time)を表す。文の時の概念はSpeech Time(ST:発話時), Reference Time(RT:指示時), Event Time(ET:出来事時)の三つの時の関係によって表されるとされている。詳しくは、Smith(1978), Soga(1983)を参照のこと。
8. 豊田(1977)では、 ET_1 と ET_2 の間隔の大きさを「動作の大きさ」という概念を用いて「～ト」と「～タトキ」の違いについて論じている。これによれば、接続詞「ト」も(44 a, b)で示される二つの読みが可能である。

9. これらの文はS₋₁が過去の事実と反する仮定を表していると解釈すれば、容認可能である。
10. (57)では、「～テイタ時」を「～テイル時」に変えても意味に変化はないが、本稿とは直接関係している問題ではないので立ち入らないことにする。これについては、Soga (1983) に詳しい議論がある。
11. 「タラ」がこのようなE T' を表す機能を習得させることによって、次のような「タラ」を用いた文を説明することができる。

(i) 来る前は日本のものは、何でもすぐれていると思っていましたが、日本に

- | | |
|--|----------------------------------|
| $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. * 来てから} \\ \text{b. * 来た時} \\ \text{c. 来たら} \end{array} \right\}$ | そうではありませんでした。 ((a)は中国人留学生の誤用) |
|--|----------------------------------|

- (ii) ふすまを
- | | |
|---|-----------------------------|
| $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. * 開けた時} \\ \text{b. * 開けてから} \\ \text{c. 開けたら} \end{array} \right\}$ | 広い部屋だった。 ((a)は香港の留学生の誤用) |
|---|-----------------------------|

- (iii) サンシャインへ行って、東京の景色を
- | | |
|--|-------------------------------------|
| $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. * 見て} \\ \text{b. * 見た時} \\ \text{c. 見たら} \end{array} \right\}$ | とてもいい景色でした。 ((a)はマレーシアからの留学生の誤用) |
|--|-------------------------------------|

12. (61 a, b, c)の「タラ」は豊田 (1979) で「発見のト」として分類されている「ト」と入れ替えてもほぼ同じ意味を表し得ると思われる。それに対し、(61 d)は「タラ」を「ト」にかえた文は非文となる。

- (i) a. トンネルを出ると、辺りには雪がたくさん積もっていた。
 b. 田中さんの部屋に遊びに行くと、田中さんはレポートを書いていた。
 c. カードを調べてみると、その本は一階に置いてあると書いてありました。
 d. * ずいぶん寒いと思うと、今日は典型的な冬型の気圧配置だった。

この文法性の違いについてはさらに検討してみる必要があるように思われる。

参考文献

- 川口さち子 (1984) 「ト・バ・タラ・ナラによる条件表現の分析」『紀要』28 早稲田大学語学教育研究所
- 北条淳子 (1964) 「条件の表し方」『日本語教育』4・5号 p.73-80 日本語教育学会
- 久野 (1973) 『日本文法研究』大修館
- 寺村秀夫 (1971) 「「た」の意味と機能」『言語学と日本語問題』くろしお出版
- (1981) 『日本語の文法(下)』日本語教育指導参考書5 国立国語研究所
- 豊田豊子 (1977) 「「と」と「～とき(時)」」『日本語教育』33号 p.90-106

日本語教育学会

—— (1978-83) 「接続助詞「と」の用法と機能 (I) ~ (V)」『日本語学校論集』

東京外国語大学外国語附属日本語学校

—— (1979) 「発見の「と」」『日本語教育』36号 p.91-105

森田良行 (1975) 「複文の文型練習——「たら」「て」を含む文型を中心に——」

『講座日本語教育』第11分冊 p.1-15 早稲田大学語学教育研究所

Alfonso, Anthony (1966) *Japanese Language Pattern* Sophia Univ. Tokyo

Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic* The Free Press, New York

Smith, Carlota (1978) "The syntax and interpretation of temporal expressions in English."

Linguistics and Philosophy 2. p.43-99

Soga, Matsuo (1983) *Tense and Aspect in Modern Colloquial Japanese*. University of British

Columbia Press, Vancouver

***** 本稿は文部省特別推進研究(1) 6006001『日本語の普遍性と特殊性に関する理論的及び実証的研究』(代表 井上和子)の援助を受けている。